

Zoom Up Tome

全国大会に出場し、活躍した市内小中高生を紹介します

「全国でリベンジ果たす」

3人の兄が一生懸命に取り組む姿を見て、自分もやってみたくて5歳から空道を始めた。空道は、防具を装備し立ち技、組み技、寝技などさまざまな攻撃が認められる総合武道。後ろ回し蹴りや上段回し蹴りを得意とする千葉が臨んだ全国大会、順調に勝ち進み迎えた決勝の相手は、前年惜敗した青森県代表の強豪選手。雪辱を果たすべく、この試合に向けて重ねてきた厳しい練習が実を結び、見事念願の優勝を成し遂げた。「今度こそリベンジしたいと思ってずっと練習してきた。自分の得意技で勝つことができ本当にうれしかった」と笑顔で試合を振り返った。

「来年は全国大会2連覇を目指したい。そして、世界で戦えるような選手になれるように練習を頑張りたい」と今後の飛躍を誓った。



2022秋季全日本空道ジュニア選手権大会
U11女子34kg以下 優勝
千葉 紗空 北方小4年

「父とつかんだ全国優勝」

父と兄の空手をする姿に憧れ、防具付空手を始めた菊田。道場だけでなく家にいるときも父と練習を続け、試合で勝つために技を磨いてきた。県大会を勝ち進み、東京都で行われた防具付空手の日本一を決める大会では、キレのある得意の前蹴りと上段の突きを武器に予選を勝ち進んだ。決勝の相手は、愛知県代表の強豪選手。序盤から両者一歩も譲らない緊迫した状況が続く中、相手の隙を見逃さず上段の突きで技ありを2本取り、全国優勝を決めた。「お父さんと練習してきたことを出し切れて良かった。決勝は難しい試合でしたが、全力で戦うことができ楽しかった」と笑顔を見せた。

「右足の回し蹴りをもっと練習して、これからの大会全てで優勝するつもりで頑張っていきたい」と意欲を見せる。



第60回全国防具付空手道選手権大会
小学2年女子組手の部 優勝
菊田 あさひ 佐沼小



第70回全国小中高児童生徒川開書道展文部科学大臣賞

佐々木仁楠(佐沼中3年)

小学1年の頃、授業で楽しさを知り、書道を習い始めた佐々木。持ち前の集中力で多くの作品を書き続け、技術を身に付けた。「出展する作品の制作時期にいろいろな大会が重なり、苦しんだり泣いたりしたこともあった」と話す佐々木。そのような状況でも、気持ちを切り替えながら筆を走らせ、作品「黄龍」を完成させた。「書道は楽しく書くことが一番だと今回の経験で改めて感じました。これからも笑顔で作品に向き合っていきたい」と話した。



第60回全国防具付空手道選手権大会組手小学5年生女子準優勝

小野寺芹奈(柳津小5年)

小学1年の時に、姉の影響で書道を習い始めた工藤。作品に対して真摯に向き合い、試行錯誤をしながら納得がいくまで書き続け、実力を伸ばした。「大会では、自分の満足できる字を書くことができたとでもうれしかった」と笑顔で話す工藤。「今回の結果は今後の自信につながった。これからも練習を積み重ね、より良い作品を書けるように頑張っていきたい」とさらなる高みを目指す。

工藤鈴々(石越中3年)



第66回J.A共済全国小学生書道コンクール半紙の部金賞
第70回全国小中高児童生徒川開書道展準大賞

小学3・4年の総合的な学習の時間で民謡の魅力に触れ、本格的に習い始めた後藤。始めた頃は、歌詞を覚えるだけで精いっぱいだった。練習を重ねる度、感情を込めて人前でも堂々と歌えるようになっていった。「聴く人の心に響くよう、抑揚の付け方や歌詞の勉強にも励んだ」と言う後藤。「本番では、練習の成果を発揮して歌うことができ良かった。これからも民謡を続け、自分の唄を通してたくさんの人に民謡を知ってもらいたい」と目を輝かせる。

第37回さんさ時雨全国大会優秀賞

後藤海歩(米山中3年)



第31回全国小学校バドミントン選手権大会女子ダブルス5年生以下3位

左から
主藤愛結(宝江小5年)
佐藤碧海(加賀野小5年)



2人は塩竈ジュニアバドミントンクラブに所属し、週末は塩竈市で練習に励んでいる。「全国大会という大きな舞台で、普段と違う雰囲気や緊張感の中、お互い声を掛け合って全力で頑張りました」と振り返る。チームでキャプテン、副キャプテンを務める2人は「全国優勝を目指すのはもちろん、自分たちのことだけでなく、チームを引っ張っていけるような選手になりたい」と決意を語った。